慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アフター・フォーディズム時代の空間的諸形態：「情報型発展様式」のインパクト
Sub Title	Spatial implications in after-Fordist times : the impact of the "informational mode of development"
Author	岩永, 真治(Iwanaga, Shinji)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1992
Jtitle	哲學 No.93 (1992. 1) ,p.249- 278
JaLC DOI	
Abstract	We are in the middle of a major technological revolution that is transforming our ways of producing, consuming, organizing, living, and dying. Cities and Regions are also changing under the impact of new technologies. Moreover, the revolution of information technologies is transforming the material forms of social organization, including both spatial forms and processes. This paper aims at exploring the new types of spatial form and process under the condition of the new technological paradigm, that is, "the informational mode of development", which is the key concept of the Regulation School. The discussion will show "the Quasi-Integration Verticale" as a new social division of labor and "the Space of Flows" which is the new spatial experience of daily life.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000093-0249

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アフター・フォーディズム時代の空間的諸形態

——「情報型発展様式」のインパクト——

岩　永　真　治*

Spatial Implications in After-Fordist Times

—The Impact of the "Informational Mode of Development"—

Shinji Iwanaga

We are in the middle of a major technological revolution that is transforming our ways of producing, consuming, organizing, living, and dying. Cities and Regions are also changing under the impact of new technologies. Moreover, the revolution of information technologies is transforming the material forms of social organization, including both spatial forms and processes. This paper aims at exploring the new types of spatial form and process under the condition of the new technological paradigm, that is, "the informational mode of development", which is the key concept of the Régulation School.

The discussion will show "the Quasi-Intégration Verticale" as a new social division of labor and "the Space of Flows" which is the new spatial experience of daily life.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程（社会学）

「魂が視覚，その他の感覚を通して，つまり肉体の助けをかりてなにかを考察するばあい，……このばあい魂は，肉体によって，瞬時も同一でない事物のほうへひっぱられ，…魂自身さまよい，掻き乱され，…酔ったようにふらふらする．なぜなら魂は，正にそのような対象に触れているからだ…」

プラトン『パイドーン』

「…もろもろの『状態（ヘクシス）』は，それに類似的な『活動（エネルゲイア）』から生ずる」

アリストテレス『ニコマコス倫理学』

0. はじめに

技術革命は，従来の生産，消費，組織，生活，死に関する様式を根底から変えようとしている．都市と地域もまた，新しいテクノロジーの影響を受けて変容しつつある．変わりつつあるのは，それぞれがもっている空間の形態である．この論文は，1980 年代以降をおもに対象として，先進資本主義諸国における ME 化，高度情報化，経済のグローバリゼーションなどによって各国・各地域の空間構造や日常生活の空間がどのように変化しつつあるのかを考察し，それをもって 21 世紀へ向けての都市社会のありかたを模索するための，一助としようとするものである．

1. 空間研究の新しい課題

新都市社会学 (New Urban Sociology) によってシカゴ学派都市社会学のイデオロギー性が批判の俎上にのせられて以降，都市社会学は，都市と国家，空間と社会，経済システムと都市など，よりマクロで新しい課題と取り組まざるを得なくなった[1] (町村，1983; 吉原・岩崎，1986)．1973 年以降の，第 2 次大戦後初の主要な景気後退に直面して，主要先進資本主義

国におけるいわゆる「都市の危機」は，「都市社会学の危機」として現れざるをえなかったのである（吉原，1983）．

しかしこんにち，事態はあらたな様相をみせつつある．とりわけ1980年代の後半に入って，それまでの，新都市社会学が提起したフレームワークでは解けないような問題が噴出してきている[2]．国家による規制緩和，新しいテクノロジーをめぐる高度に熟練化した構想者・エンジニアと未熟練作業員との分化，国境を越えた地域間関係の形成，地域の特化，経済のリストラクチュアリングの下での再開発問題などがそうである．他方，家庭はますますイメージ，サウンド，ニュース，情報交換の自己充足的世界を備えるようになっている．ヴィデオ録画はこの自己充足を補強し，テレビ観賞の時間と内容により大きな可能性を与えている．同時に，家庭は地上の情報のインスタントなレシーバーとなり，イメージやサウンドの選択的消費の個人的な避難所になっている（Stark, 1984）．新しいテクノロジーのインパクトは，労働現場や都市―地域空間の構成にだけでなく，われわれの家庭生活の場面にも及んでいるのである．「都市」の社会学は，なによりも「都市社会」の学として，こうしたマクロ―ミクロの変化をトータルに扱える視点を現実から要求されているといえよう．

ところで，空間は「社会の反映」ではない．空間が社会である[3]（Giddens, 1981; Castells, 1984）．空間は社会の基本的な物質的次元のひとつであり，空間を社会関係から独立したものとみなすことは，現実には自然を文化から分離することであり，あらゆる社会科学の基本原理を破壊することである．その基本原理とは，物質と意識とは相互にかかわっているということであり，さらにこの物質と意識の融合が，歴史と科学の対象の本質であるということである．空間形態は，少なくともわれわれの惑星にあっては，人間の行為の所産なのである．したがってまた，空間的諸形態は，所与の生産様式と発展の特殊な様式によって諸利害を表現し，実現することであろう．われわれの時代の特殊な発展様式とはどのようなものか？

レギュラシオン学派によれば，先進資本主義諸国における第2次世界大戦後の高度成長期の発展様式は，「フォーディズム (Fordism)」と呼ばれるものである (Aglietta, 1976; Lipietz, 1986; Boyer, 1986; Giddens, 1989/1990; Harvey, 1989).

彼らによれば，「発展モデル [様式] (Model 〈Mode〉 of Development)」としての「フォーディズム」は 3 重に分析することができる (Lipietz, 1989a; 1989b; 1990; Leborgne & Lipietz, 1990a/1990b; Delorme, 1990). 第 1 に，労働組織の一般原理として，あるいは「テクノロジカル・パラダイム ("Technological Paradigm")」[(4)] として「フォーディズム」は，テーラー主義＋機械化より以上のものではない．テーラー主義が意味するものは，生産管理部 (Organization & Methods Office) の業務である労働過程の構想と，作業現場での標準化され，形式的に定められた業務の遂行とのあいだの，厳格なる分離である．機械化とは，O & M の集団的知識の，物的装置への埋め込みの形態 (Form of the Embedment of the Collective Knowledge of O & M into the Material Apparatus) である．これは一般には "フォード・システム" と呼ばれてきたものであるが，その最大の特徴は，組立工（したがって人間）自身の「機械化」にある[(5)] (渋井, 1991). この側面に還元すれば，「フォーディズム」はたしかに「大量生産」を誘発する．

第 2 に，マクロ経済的パターン（あるいは蓄積体制）として「フォーディズム」が意味するものは，生産性の上昇が，利潤により賄われる投資の拡大と賃金生活者の購買力の増大の両方と調和する，ということである．生産財と消費財の販路は生産性のペースで拡大するようになった．繰り返し注意しなければならないのは，「フォーディズム」は単一の企業において存在するものではないということである．

さらに第 3 に，協調 (Coordination) の規則の体系（あるいは調整様式）としては，「フォーディズム」は，余剰労働力に対する厳しい制限をともな

った長期の賃金契約を意味する．そこには，物価と生産性にインデクセーションされる賃金上昇のプログラム化と，福祉国家と社会保障を通じての大幅な所得の社会化による賃金稼得の恒久的な保証，の2つが含まれる．その見返りは，経営特権の組合による承認である．そのことの結果として，上にあげた労働過程の組織原理とマクロ経済的パターンの双方が尊重されることになるのである．

先進資本主義諸国においては，このように3重の原理として分析される「フォーディズム」が，1970年代以降危機に陥ったとされている．これについてはさまざまな説明がなされている (Glyn et al, 1988; Lipietz, 1985; 1989b; Boyer, [éd.] 1986).「ポスト・フォーディズム」をめぐる論議もかまびすしい (Kato & Steven, 1989; Badham & Mathews, 1989; Itoh, 1990; 宮本, 1990; Coriat, 1990). しかしここでは，「ポスト・フォーディズム」をめぐる議論には直接は立ち入らない．この論文では，1970年代初頭までの先進資本主義諸国におけるマクロな経済の発展モデル（様式）を基本的に「フォーディズム」であったと承認し，それ以降を幾人かの論者にしたがって「フォーディズム以降の (After-Fordist) 時代」と規定することにする (Leborgne & Lipietz, 1990a/1990b; 山田, 1991; 若森, 1991). そのうえで，こんにちの空間諸形態の変容についての考察を進めていきたい．

2. 技術革新，経済のリストラクチュアリングおよび都市—地域過程

フォーディズム以降の経済的・社会的発展の第1の特徴は，最初に触れたように，それが技術革新に主導されていることである．しかもその技術革新には，つぎのような2つの特徴がある．第1は，技術の発見の対象が，それらの応用の対象同様に，情報であることである．マイクロエレクトロニクスがなすことは情報の処理加工であり，最終的には，情報の生成

である．テレコミュニケーションがなすことは情報の送信であり，それはループとフィードバックの相互作用の複雑さの増大をともなっており，そのスピードはますます大きくなり，そのコストは低くなっている．ニュー・メディアは，潜在的にはますます脱中心化され個別化された様式でもって，情報をばらまく．さらに遺伝子工学は，生物の情報システムを解読し，かつそれをプログラムしようと試みる．

第 2 の特徴は，技術革新の結果が生産物指向 (Product-Oriented) であるよりも過程指向 (Process-Oriented) である，という事実にかかわっている．つまり，ハイ・テクノロジーはある特定の技術ではなくて，生産と組織の1形態なのであり，それらの作用を変革し，プロセスそれじたいの知識を増大させることで，より大きな生産性もしくはよりよい作業を達成させるようなものなのである．のちにみるように，技術革新のこの第 2 の特徴は第 1 の特質にささえられて，フレシキブルな企業間ネットワークの構築を可能にしている．

したがって，なによりも現在の技術革新の重要なインパクトは，経済の領域で感じられている．そして，ハイ・テクノロジーが都市—地域の空間構造を深く修正するのはおもに新しい経済をとおしてだ，というのが，私の主要な仮説のひとつでもある[6]．多くの論者たちが議論してきたように，資本主義システムは，1973-82 の 10 年間に主要な危機を通り抜けてきた (Boyer, 1986; [éd.] 1986; Lipietz, 1985; 1989a; 1990; Delorme, 1990)．しかし，70 年代後半以降の経済的・社会的発展を捉えられるような概念は，まだ存在しない．「フォーディズム以降」というのは，確立した新しい産業的発展モデル（様式）にたいする呼称ではない．ひとつの時期区分の試みであるにすぎない．しかし，さきにあげたような特徴をもった技術革新に主導された経済的・社会的発展のある歴史的傾向は，たしかに存在するのであって，ここではとりあえずそれを「情報型の発展様式 (Informational Mode of Development)」と呼んでおこう．もちろんそれは，新しい蓄積

体制と新しい調整様式の確立を意味するものではない．「フレキシブルな専門化」等はそれじたい，「ポスト・フォーディズム」ではない[7]．「情報型発展様式」によって私が示唆しようとするものは，テクノロジカル・パラダイムをめぐる問題にすぎない (Leborgne & Lipietz, 1990a/1990b).

フォーディズム以降，あるいは1945-73年のケインズ・モデル以降といってもよいが，さきの2つの特徴をもつ技術革新に主導された先進資本主義諸国の発展の新しい歴史的傾向は，つぎの3つの過程に依存している．まず第1に，資本—労働間の力関係の基本的な変化．戦後の労働運動の成果（賃金や諸規制）にたいして，資本が再びイニシアティヴを獲得している (Portes & Walton, 1981; Gordon et al, 1982; Sabel, 1982; Carnoy & Shearer, 1980). 第2に，国家と公的部門の新しい役割．経済への政府の介入は，少なくなっているというよりも，集団的消費 (Collective Consumption) から資本蓄積へ，正当化 (Legitimation) から支配へ，その強調点が変わっている (O'Connor, 1984; Wilensky, 1974; Gough, 1979; Crouch, [ed.] 1979; Dumas, [ed.] 1982; Leontieff & Duchin, 1983). 第3は，新しい国際的・地域間的分業の形成である．そこにおいて資本・労働・生産・市場・管理は，大企業の戦略に可能な限りベストな条件であるように，連続した可変的な幾何学へと立地を変えている．領域的に特殊なユニットに対する社会的・政治的な諸結果にもかかわらず，である[8]．この3番目のものは，新しい空間の発展の傾向を示唆している (Palloix, 1977; Frobel et al, 1980; Bluestone & Harrison, 1982; Sawers & Tabb, [ed.] 1984; Scott, 1986; 1988). 以上の3つの過程において，新しいテクノロジーは主要な役割を演じているのである．

さて，技術革新に主導された「情報型発展様式」のもつこれらの新しい傾向は，都市—地域空間の形成に，どのようなインパクトをあたえているのであろうか．それを次節では，産業組織の変容との関連に限定してみていきたい．

3. 産業組織の再編と都市—地域空間構造の変容

3.1 産業組織の再編と都市—地域社会への影響

フォード主義的発展モデルにおける産業組織の古典的な形態は，テーラー主義的原理にしたがった工場間の企業内分業（設計および組織管理事務所，熟練による機械制生産，アセンブリーラインのような不熟練作業，のあいだの分業）であった．この「技術的分散」ははっきりしているので，工場設備間の分業は企業間の分業として実現される．しかしこの技術的分散はしだいに，さまざまな地域における多様な工場設備として，すなわち「領域的分散」として実現されるようになる．この領域的分散は，低熟練の下請け業者に関するかぎりでの，分離した諸企業間の「垂直的分散（戦略的に重要な業務をのぞく業務の大幅な下請け化）」とも把握される．これはリピエッツによって，「産業部門内分業（Circuits de Branches）」として把握されているものである[9] (Lipietz, 1985; 1986). このばあい，諸種のタイプの工場設備は，3 種類の地域（高度の熟練労働力と複雑な市場を抱えた地域，古典的な半熟練労働力の工業地域，低熟練・低賃金の地域）に分散する傾向がある．

ところが近年産業地理学者が積極的に取り組んでいるのは，「垂直的分散」への広範なる傾向である (Storper, 1985; Walker, 1985; Scott, 1988). もちろんこれは，労働力市場の特定の地理的条件を求めて必然的に空間的分散が生じたことの結果でもあるが，重要なことは，基軸的な業務（研究開発，組織管理，マーケティング）は「垂直的に統合（同一企業内部の諸種の技術的業務が統合）」されたままである，ということである．すでにみてきたように，企業は技術革新によって設計・製造・販売・購入の各プロセスの緊密かつ柔軟な連結を可能にしており，「ジャスト・イン・タイムの原則」が企業内部から企業間関係全般にまで徐々に浸透するようになっている．技術革新の主要な特徴はその対象が情報でありかつ過程指向であ

ることをさきにのべたが，現在，CIM (Computer Integrated Manufacturing) 等の導入によって親会社と関連企業・系列企業のあいだに総合的な情報ネットワークが張りめぐらされ，企業の取引関係はより緊密なものになろうとしている (今井・金子，1988). また，FMS (Flexible Manufacturing System) による生産工程の自動化もすすめられている (須藤，1990; 1991).

この段階では，企業内分業の企業間分業への展開が，国内および国外の諸地域への空間的な拡大＝展開となって，新しい都市—地域空間の形成が促されるようになってくる. 1980年代になって顕著になってきた世界各地での新しい (領域的に特化された) 生産空間の形成は，たいていのばあい，みたような新しいテクノロジーに主導された産業組織の再編をめぐって生じてきているとみることができる. たとえばサンタ・クララ地方 ("Silicon Valley"), ボストンの産業地域 ("Route 128"), 南部フランス，英国のM4回廊地帯等の生産地帯の形成がそうである (Glasmeier, 1985; Saxenian, 1985など). また，日本，韓国，第3イタリア，バーデン・ヴュルテンベルク等の発展の軌跡や，米国，英国，フランス等の諸国家・諸地域の世界経済システム内での地位の低下傾向なども，新しい空間的分業 (New Spatial Division of Labor)[10] の発展の論理で理解すべきであろう. フォーディズム期の1960年代に，ポルトガル，スペイン，ポーランド，ルーマニア，メキシコ，東アジアのフリー・ゾーンが世界経済システム内で半周辺ないしは周辺国化していったのとは，あきらかにちがった論理が作用しているのである[11] (Lipietz, 1985).

この新しい空間的分業にともなう新しい都市化の形態の理解のために参考になるのが，「垂直的準統合 (La Quasi-Intégration Verticale)」の概念である (Houssiaux, 1957; Courlet, et al. 1987a; Courlet, 1987b; Leborgne & Lipietz, 1987; 1990a/1990b; 須藤，1990; 1991). これはフランスの社会学者であるウーシオなどによって提起された概念で，経済学では，

ヒエラルキー（企業組織）と市場との中間領域を照らし出す概念として有効である．リピエッツとルボルニュによれば，この垂直的準統合を特徴づけるのは，供給者と顧客との結びつきが安定していることであり，供給者の回転における顧客の貢献度が大きいことであり，下請けの活動が製造から設計にまでおよぶことであり，企業間関係の非市場的形態がヒエラルキーから協力関係にまでおよぶことである (Leborgne & Lipietz, 1987)．このばあい親企業は，「垂直的統合」と「垂直的分散」の双方の恩恵に浴することになる[12]．

この垂直的準統合に欠かせないのが，じつは CIM である．CIM は，生産工程の高度技術化・高度情報化と販売・購買，企画などの間接部門の情報ネットワークを統合し，需要動向に即応できるフレキシブルな経営システムを確立しようというものである．しかし CIM の導入は，同時に，親企業と関連企業あるいは系列会社のあいだの総合的な情報ネットワークを可能にし，企業間関係を地域空間を越えて緊密なものにするのである．こうして，企業と地域を越えて，技術移転，共同研究，ジョイントヴェンチャー，その他の戦略的同盟が一般化してくる (須藤，1990; 1991)．

垂直的準統合という産業組織の新しい形態を，職業構造（あるいは労働市場）や都市形態の面からみてみよう．垂直的準統合がとる職業構造の特徴としてまずあげなければならないのは，高度に熟練した設計師や技師と，不熟練の単能工とのあいだの分離である．これは技術革新に主導された垂直的準統合の展開が，部門間で [I] 研究開発，構想 [II] 熟練労働作業 [III] 単能工作業の 3 つのレヴェルをともなっていることと関係している (Lipietz, 1985; 1986; 平田，1989)．一方では専門（研究開発・構想）部門の急速な発展にともなって，少数の労働者の職業上の地位の格上げがなされる．他方で多くの労働者は，労働集約的サーヴィスか職業ヒエラルキーのなかで格下げされた製造業のどちらかにあって単純作業につくようになり，より低賃金の仕事へと限定されてくる．実際，先進資本主義国では，こうし

た傾向を指摘している論者が多い (Markusen, 1983; Hirschhorn, 1984; Storper, 1985; Glasmeier, 1985; 斉藤, 1988; 熊沢, 1989; Lecler & Mercier, 1989).

こうした2極分化した職業構造 (あるいは労働市場) は，それじたい収入分配に反映し，“ミドル・クラスの消滅 (Disappearance of the Middle Class)” と呼ばれているものへとつきすすむ (Thurow, 1984). リピエッツとルボルニュの言葉を借りれば，先進資本主義国は，「2 層型の」，「砂時計型の」，すなわち「ブラジル型の」社会へとすすんでいくであろう (Leborgne & Lipietz, 1990b). 2重化された都市社会の興隆である．都市形態への影響は，空間のセグリゲーションとして現れてくる可能性が高い．研究開発，設計，金融，高度な第 3 次的職務は，わずかの核心的な中心部に集中する．より正確にいえば，これらの業務は，郊外と，2 次的都市センターと，周辺的な事務仕事の専門別生産エリアとによって序列的に編成されいた，いくつかの中央商業地区に集中するのである (Ibid, 1987).

3.2　分業の国際的・国内的展開と新しい空間形態の形成

垂直的準統合の組織展開が都市—地域空間の形成にかかわるのには，いくつかのパターンがある．第 1 に，国境を越えて国際分業という形で展開されるばあいである．たとえば，IBM など，米国の主要な多国籍企業の他国への移転にみられるものである．この類型は「領域分散型」と呼ばれる．英国，フランスの企業にもこの類型がみられる．この類型の展開は，国境を越えて中心—(半周辺)—周辺の都市—地域構造を形づくる．日本のハイテク熟練作業地域と第 3 世界の未熟練・不熟練作業地域と米国のいくつかの地域との関係がそうである (Scott, 1988).「領域分散型」のばあいには，諸国家・諸地域内で産業の著しい空洞化を引き起こしたり，ハイテク・イノヴェーションの他産業への普及が緩慢であったりする傾向がある．

垂直的準統合という社会的分業の新しい形態がもたらす都市—地域空間

形成の，第 2 のパターンは，国民経済圏や地域経済圏においてネットワークが形成されているばあいで，「領域統合型垂直的準統合」とも呼べるものである．親企業がノードになって専門家企業（下請企業のなかで，高度技術を蓄積することのできた，革新能力の高い企業），金融システム，公共部門を，一定の経済圏内部において統合するものである．このばあい，マクロ経済的な加速—増幅効果は，依然として一国一地域内部にとどまっており，この一国一地域は直接的な地域内結合を通して，ハイテク・イノヴェーションの普及を指揮する．イタリアのエミリア・ロマーニャ，ドイツの多くの州，フランスのイゼール，サヴォワなどの地方，米国のマサチューセッツ州，あるいはスウェーデンに典型的にみられるものである[13]．

どちらのばあいにも，模索されているのは分業の新しい形態である（内田，1953; 平田，1969; 1989; Boyer, 1989）争われているのは（都市—）地域空間の意味[14] (Locality) である (Getimis & Kafkalas, 1989).「垂直的に準統合」されることも，「領域分散型」が可能になることも，いずれも社会的分業のある新しい形態とその地域空間内での展開が問題になっているのである．レギュラシオン学派のシェーマでいえば，マニュファクチュア，機械制大工業，フォーディズムにつづく社会的分業のある新しい形態の領域的形成が問題になっているのである．分業の側面に限定すれば，ピオーリとセーブルが“新しい産業分割”として示唆しているのも，同様のことであろう (Piore & Sabel, 1984). 空間の理論とその調査研究はこんごますます，方法論一般に関して，また経済学・地理学・社会学のどの学問分野においても，ひとつの批判的で包括的な見方を維持するために，“地域空間 (Locality)” にこだわりつつ，なお“地域空間”を越えて考察をすすめていく必要があるだろう．

ところで，生産と再生産，分業と生活様式は，同時に一方を他方に還元できないような 2 つの次元である (Bobroff, Campagnac, Veltz, 1980; 岩永，1989; 1990). 情報型発展様式の影響は，日常生活の空間にはどのよ

うにでてくるのだろうか．若干の考察を試みたい．

4. 日常生活における空間形態の変容

フォーディズムに典型的な生活様式は，“オートモービリゼーション”と家庭における“メカニゼーション”に象徴的に表明されているものである (Davis, 1984). 大量生産と高賃金に裏打ちされた大量消費型のこの生活様式は，一般に，“アメリカン・ウェイ・オブ・ライフ”として知られているものである (Lipietz, 1990; 矢澤, 1990). フォード的妥協は第2次世界大戦後の世界全体で，アメリカ的生活様式として受け入れられた．この生活様式は，生産至上主義と「快楽主義」を旨とするモデル，つまりすべての人が商品の消費の増加を通して幸福を追求するモデルである[15]. このモデルに異議を唱えたのは，ヘルベルト・マルクーゼのようなごく少数の知識人だけであった (Marcuse, 1964).

核家族と耐久消費財に象徴されるこの生活様式のもつ空間形態は，いまだ「測定可能な」現実であった[16]. 空間の知覚は，既知の次元への参照と，蓄積された経験との比較によって構築されていた．ところがこんにち，われわれはそうした空間との関係を失いつつある．メルッチによれば，最近の20年間に生じたことは[17]，限りなく小さな空間への情報の集積である．情報の移転や交換はもはや物理的次元とは直接の関係をもたない．直接経験にもとづかない空間との接触がはじまったのである．ヴィデオ，ホーム・コンピュータなど，空間は多面的で，非連続的になった (Melucci, 1989).

だが依然として，われわれは空間を取り扱わなければならない．「場所の空間 (Space of Places)」をではなく「フローの空間 (Space of Flows)」[18]をである (Martin, 1981; Castells, 1984; 1985; 1989). 諸機能と権力諸関係の階統が民族 (Nation) と世界 (World) とをめぐってテリトリーを組織しているのであり，生産・分配・管理の機能 (Functions) と単位 (Units)

を分離してそれぞれをもっとも条件のよい地域 (Area) に配置しながらではあるが，すべての活動をコミュニケーション・ネットワークをとおして接合しているのである (Friedmann & Wolff, 1982; Friedmann, 1985; 町村, 1986). 組織の論理がしばしばかわり，社会・経済システムが大規模な組織の多様性に対応するようになるにつれて[19]，われわれはますます変わりやすい幾何学の空間に住むようになっており，そこではおのおのの場所の意味[20]がその歴史や文化や制度から逃れており，情報の戦略と決定の抽象的なネットワークによってコンスタントに再定義されている.

消えていく傾向にあるものは，人びとの意識における「場所の意味 (Meaning of Places)」である. おのおのの場所，おのおのの都市は，その現実的な社会的意味を，ひとつのネットワークの階統における位置からうけとるようになるだろう. そのネットワークの階統とは，そのコントロールとリズムがおのおのの場所から，さらにはおのおのの場所をもつ人びとから逃れているようなものである[21]. さらに人びとは，増大する特化空間の連続的再構築にしたがって移動させられるかもしれない. 情報型の発展様式が日常生活空間へともたらす影響の第1は，およそ以上のようなものである. 空間は（情報の）フローへと解体されている. 都市は，居住者の知らない決定にしたがって爆発したり消滅したりするような，シャドーになっているのである.

以上のような「組織の空間」と「経験の空間」との分離傾向の意味するものはなにか[22]. この歴史的傾向の意味するものは，なによりもまず「人間的経験」の破壊[23]であり，「コミュニケーション」の破壊であり，したがってまた「社会」の破壊である. 内的な体験は外的な体験から切り離されている[24]. 新しく試みられている“都市の意味 (Urban Meaning)”は，生産物と歴史から人びとを，空間的・文化的に切り離すことであるようにみえる.「地域のアイデンティティ」「近隣の防衛」「生活の質の追求」をめぐる異議申し立ては，そのような過程とは無関係ではないであろう[25]. 問

われているのは“もうひとつの都市の意味”であり，新しい「コミュニケーション」の論理なのである．

幸福を追求する権利が現在，「所有の欠乏 (Un Manque d'Avoir)」によってではなく「存在の欠如 (Un Manque d'Être)」によって制限されているといわれるのも (Lipietz, 1989b; 1990)，同様のことを意味しているのであろう．こんごは空間体験と時間体験をもつ人間の在り方そのものが，ますます問われてくるであろう．

5. アフター・フォーディズム時代の空間的諸形態

この 20 年のあいだに，都市をめぐる問題構成はすっかり変わってしまった．レギュラシオン学派の術語を使った「ポスト・フォーディズム」論議はまだ落ち着くところを知らないが，技術革新に嚮導されたある新しい産業的発展様式が，「都市的な問題構成 (La Problematique Urbaine)」をまったく変えてしまったのである．したがってまた，都市空間をめぐる問題の位相も変わった．フォーディズム期の都市は，ほぼ均質的な労働力の集団的再生産の，空間的単位であった．こんにちでも，都市は依然として，労働力の集団的再生産の単位ではある．しかし，集団的に再生産される労働力の質は，都市内部で 2 重化してきている[26]．農村地域が，均質な労働力の集団的な再生産の「空間的な」単位に，機能的に割り当てられる可能性も出てきている．都市は，単なる労働力の集団的再生産の空間的な単位ではなくなった．というよりも，空間の意味そのものが変わったのである．

空間の意味が機能的なユニットによって割り当てられるようになるにつれて，われわれの日常の空間感覚もまた，変化した．都市的世界は，リズム，サウンド，記号の内的世界へと集約されるようになり，空間的な近接が人間同士のコミュニケーションの第 1 条件ではなくなった．都市的社会関係の特質のひとつであった「間接的接触」(Wirth, 1938) は，たんなる

「物理的接触」におきかわった[27]．われわれは，たんに誰ともあわず，世界全体からニュースを受信しながら，あるいは経験の全体的な領域をみずからの眼と耳を通しながら家に居ることができるようになるだけでなく，同時に，われわれの内的体験から離れることなく家から出ることができるようになっている．コミュニケーション体験の個別化が生じているのである．高度に特殊化されたラジオ放送局やポータブル・オーディオやヴィジュアルな装置が，これらの新しい傾向をもっともよく表現している．

それゆえ，ひとつの傾向として，つぎのように言うことができるであろう．新しいテクノロジーは，生産・労働の組織においてと同様，私生活の領域においても，経験の「脱地域化 (Delocalization)」を推し進めている，と．家庭は近隣や都市とかかわらなくなりうるのであり，しかも依然として，ロウンリーで孤立した場所ではないのである[28]．声・音・ニュース・色・イメージ・ゲーム・アイデアに抱かれて人は住むだろう．だがわれわれはワン・ジェスチャーで，すべてをスイッチ・オフすることもできるのである．

厳密に技術的な観点からいえば，個人と，衛星で通信され特定の人びとと特定のモードにターゲットを絞られた世界文化とのあいだの媒体は，もはや存在しない．したがってそのあいだには，もはや社会も存在しないし，都市も存在しない．少なくともわれわれの知る限りそうである．にもかかわらず，社会関係は技術の変化の直接的結果ではないし，そうであるなら，新しい都市の形態は他の過程によっても同時に形づくられるはずである．たとえば，エスニック・カルチャー，ローカル・ネットワーク，コミュニティー組織等の持続性によって．草の根運動 (Grassroots Movements) はたしかに，情報型の発展様式と新しい国際分業による空間の再構成の加速化をめぐって生じてきている[29] (Castells, 1983a; 1984; 1989)．しかし，独り暮らしの増加，家庭サイズの縮小，核家族の危機等をわれわれが知るとき，現在の技術トレンドは，個別化への社会的傾向を補強しているよう

にもみえる.

新しい空間のフローは歴史的真空のなかでは発展しない. それらはこれまで存在してきた都市文明の諸構造の上に形づくられ, 社会的排除の旧くて新しい状況と交錯する. フローは機能的に有効で, 社会的に価値のあるネットワークを結びつけている (Baldwin et al, 1980). 結節の場所はもっとも重要な活動を保障し, 新しい居住エリートを歓迎している. スケジュール化された個人主義的な家庭は, 終わりのない郊外スプロールのなかで自身の論理と価値へとむかい, みずからのドアを直接的な周囲の環境にたいしてとざし, みずからのアンテナを銀河系全体のサウンドとイメージへとひらいている[30]. フローをめぐって組織されるそのような構造のなかでは, 価値のない (あるいは価格をつけられない) 人びと・活動・文化が容易にそのネットワークからスイッチ・オフされる, という問題も生じる (Williams, 1982).

われわれは, かつてあったような都市的—地域的な危機に直面しているのではない. われわれがいるのは, たがいに知ることはないが実際には同じシステムの部分であるような, 諸要素間の相互の発展過程である[31]. 別の言い方をすれば, 同じ空間構造内での, 多様な社会的, 文化的, 経済的な論理の, 矛盾をはらんだ共存を目撃しているのである. 新都市社会学は, 「都市の危機」を主要な分析の対象にしていた. その意味では現在, ポスト・新都市社会学の生誕が待ち望まれているのかもしれない.

さらに指摘しておきたいのは, 単一の意味をもつ場所が最高の機能とかかわる場であるような都市では, すなわちひと握りのものにとって意味をもつ空間の形成によって, 同じ空間が, 多くの人にとっては排除の空間となる傾向があることである. こういった傾向は, 公共空間 (Public Space) をレジャー空間 (時間とお金をもっている人にとっては) と放浪の空間 (労働と居住の機能的割り当てにフィットしない人にとっては) とに還元するようなやり方で, 時間と空間の機能地帯制 (Functional Zoning of

Time and Space) を増大させている[32].

アフター・フォーディズム時代における空間的諸形態をささえているのは,「空間の分散」と「領域的ハイアラーキー」(最高レヴェルでの都市的集中をふくめて), およびそれらを「機能的に連結」しているある論理である. それをこの論文では, 産業組織の新しい形態 (あるいは社会的分業の新しい形態) としての垂直的準統合という概念であつかった. また日常生活空間の変容を,「フローの空間」の生成の観点から考察した. しかし, アフター・フォーディズム時代における空間的諸形態の変容の分析は, 社会の技術経済的リストラクチュアリングと, 現在進んでいる過程の形態を形成し, 変更し, 逆転させようとすら試みている社会的, 政治的, 文化的諸闘争の, 両方をふくまなければならない. この論文では後者の分析を充分にすることができなかった. それはまた別の機会にゆずることにしたい[33].

日常生活空間の個別化とフロー化は (ライフスタイル論の隆盛はこの現象の裏返しであるが), みてきたように, 技術経済的リストラクチュアリングの社会的・文化的諸結果のひとつである. それは新しい空間 (と時間) の体験でもある.「都市空間の社会的生産」というテーマは, こんごますます重要性を帯びてくるだろう. そしてそれは, 都市社会学のパラダイムの再構成をうながさずにはおかないであろう. それは, シカゴ学派都市社会学と新都市社会学のパラダイムの総合を求めることでもあるだろう. そのとき都市研究はどのような姿をみせることになるのか. その行方はまだ誰にもわからない.

空間の社会的生産というテーマに都市社会学者が積極的に取り組むようになってから, まだ 10 年はたっていないのである.

補　注

(1) 1970年代に新都市社会学がおもにとりあげたテーマは,「資本主義的都市化」「低開発国（従属国）の都市化」「不動産資本と都市」「集団的消費 (Collective Consumption)」「都市社会運動 (Urban Social Movement)」等であった. 当時活躍した人たちに, J. ロジキーヌ, M. カステル, C. G. ピックバンス, M. ハーロー, R. E. パール, J. レックスらの名が挙げられる.

(2) R. E. パール, D. ハーヴェイ, M. カステルなどは, 70年代のフレームワークを再構成しながら, 果敢に新しい課題に取り組んでいる. それぞれに独自の理論的地平を切り拓きつつあるが, なかでもハーヴェイとカステルの仕事ぶりには圧倒されるものがある (Harvey, 1985a; 1985b; 1989; 1990; Castells, 1983b; 1984; 1985; 1989). 他方, 新都市社会学のフレームワークが抽象的で難解なものに傾く傾向があったことへの反省もあって, シカゴ学派都市社会学のパラダイムへの回帰現象（“再発見”）もみられる（吉原, 1991). 新都市社会学はその生誕の地名を採って, フランス派都市社会学 (French School of Urban Sociology) とも呼ばれるが, そのおひざもとでも状況は同じようである (Topalov, 1989, pp. 644-645).

本論文は, 新都市社会学が切り拓いたマクロな理論的地平を継承しながらも, ミクロな（日常生活上の）問題とそれとの接点をどのようにみいだせるのかということを, 積極的に問うていくような立場にたっている（岩永, 1989; 1990).

(3) H. ルフェーヴル (Lefebvre, 1974) 以降,“空間”を主題に据えた都市社会研究が着実に増えてきた (Lipietz, 1977/1983; Gottdiener, 1985 など). 日本では, 経済学で金倉忠之 (1991), 地理学では松原宏 (1988; 1990), 社会学では大谷信介 (1986) が, 本論文のテーマに近い領域で研究をおこなっている.

(4)「労働編成モデル」「産業化モデル」「産業パラダイム」とも呼ばれる (Lipietz, 1989a; 1989b; 1990; Delorme, 1990).

(5) 組立工個人の「機械化」として考えるときには, それぞれの熟練工の習得技術およびかれのもつ知識の“内容”が, さらに問題になってこよう (Boyer, 1989).

(6) しかし本論は, 技術決定論や経済還元主義の立場を採るものではない.

(7) フォーディズム以降を展望するために, さまざまな概念が提起されている. W. ハラルは, 産業パラダイムの古い資本主義にたいして脱工業パラダイムの新しい資本主義を, 7つの点（〈1〉進歩のフロンティア〈2〉組織〈3〉意思決定〈4〉制度的価値〈5〉経営・管理の焦点〈6〉マクロ経済システム〈7〉世界システム）にわたって特徴づけている (Halal, 1986). すなわち, 〈1〉スマ

ートな発展〈2〉市場のネットワーク〈3〉参加型のリーダーシップ〈4〉多様な目標〈5〉戦略的な経営と管理〈6〉民主主義的で自由な企業〈7〉資本主義と社会主義の混合，である．アグリエッタ & ブレンデール (1984)，ラッシュ & アーリー (1987)，スウィンゲドゥ (1986)，ハーヴェイ (1989)，マーレイ (1988) も，それぞれに“ポスト・フォーディズム的な”社会についての概念提起をおこなっている．

なお，レギュラシオン・パラダイムにおける“発展様式”の概念は，もともと「フォーディズム」「ポスト・フォーディズム」にたいして使われるべきものであるが，この論文で「情報型発展様式」というばあいは，言葉の意味をそれよりもややゆるやかに捉えて使っている．

(8) 地方自治体の諸制度や地域の民俗・習俗などは，いかなる主体の脱地域的な行動にたいしても，基本的には制限となる．

(9) ゲティミスとカフカラスは，国境を越えた産業部門内回路（分業）の展開を強調しすぎることに異議を唱えている (Getimis & Kafkalas, 1989, pp. 5-7).

(10) これは，水平型/垂直型の，2重の国際分業として展開している（平田，1989, pp. 12-17).

(11) リピエッツはこれらの国の発展モデルを，“周辺部フォーディズム (Le Fordism Périphérique)”と名づけた (Lipietz, 1985, pp. 73-77. 邦訳, 1987, pp. 113-118).

(12) そのことのひとつとして，同一企業内部の分業の空間的・領域的拡散が可能になる．

(13) 「領域統合型垂直的準統合」の事例研究では，フランス，イタリアの例をあつかったクールレたちのものがすぐれている (1987a; 1987b).「準統合」のヴァリエーションについては，ルボルニュ (1987)，レーグル (1989) が参考になる．

(14) のちにのべるが，情報のフローのネットワーク（「フローの空間 (Space of Flows)」の形成は，“地域空間の意味 (Localities)”を新しい社会運動のひとつの争点にする．

(15) 音楽・ヴィデオ装置，ホーム・コンピュータなどの，ME 革命によってもたらされた新製品は「時間消費型」であり，車，洗濯機などのフォード主義的商品は「時間節約型」である (Lipietz, 1989b, pp. 22-23).

(16) 車に乗っていける郊外住宅がそうであった．スウィンゲドゥとケストルートによれば，郊外化による消費空間の組織化は，フォード主義的な発展様式に典型的なものである (Swyngedouw & Kestloot, 1990, p. 259).

(17) メルッチ，ハーヴェイ，カステル，レギュラシオン学派など，転換期のスパンをこの 20 年とする捉え方は，論の振幅とは反対に，奇妙にも一致してい

る．

(18) 「フローの空間」とは，技術的な観点からみれば，情報の流れが物的な制約を越えて形成する範域のことである．

(19) その意味でわれわれはこんにち，“ディス・オーガニゼーション・マン”であることを強いられている (Whyte, 1956. cf).

(20) これは本来，ローカルなもの (“Locale”) である．

(21) こうしたネットワークの階統の頂点にたつのは，IBM のような多国籍企業か，ニューヨーク，ロンドン，フランクフルト，ロサンゼルス，東京のような，数少ない大都市である．

(22) 山之内靖はこれを，社会システム論の観点から，“フレキシブル・アイデンティティ”の問題としてあつかっている (山之内，1991a; 1991b). “脱組織人”と“柔軟な個性”は，アフター・フォーディズム時代の人間性の特質であるように思われる．

ところで山之内のばあい，「社会の秩序はいかにして可能か」という社会学的な問いが問題設定の根底にあるが，都市社会学の観点からいえば，それは「“都市的な”社会秩序はいかにして可能か」という問題でもある．

(23) 具体的な場の，物質的な制限のもとで生活してきた人間の，生活感覚の破壊である．しかしこのことは他方で，新しい人間関係，新しい社会，これまでとはちがったコミュニケーションのありかたをも示唆している．

(24) 内的な体験と外的な体験の分離は，内的な時間と外的な時間との分化でもある．すなわち，人為的に広げられた内的時間の拡大でもある (Melucci, 1989, pp. 103-117).

(25) 高級官僚やビジネス・エリートはべつにして，ふつうひとは，具体的な場所 (Places) に囚われ，制限されている．われわれは所与の文化のなかで生活しており，特定の場所をめぐってみずからの生活を組織し，領域に基礎づけられた諸制度を通じて，みずからの力を行使するのである．諸社会運動（フェミニズム，エコロジーなど）もまた，しかりである．しかし諸社会運動は現在,「フローの空間」の形成をめぐって，ファンダメンタリズムであるがゆえに社会変動のなかで一般的な利害をつくりだせずにいるようにみえる (Castells, 1989, p. 203). それらは，歴史に根ざした地域社会のダイナミズムに高度に依存しており，その領域的基礎をめぐって組織される傾向がある (Castells, 1983b, pp. 311-336). すなわち，特殊な場にもとづいた利害を防衛する傾向がある．

(26) 注 (21) で挙げたような大都市で，とくにこの傾向がみられる．その他の都市は逆に，特定の労働力を必要とするようになりつつある．たとえば日本で

は，東京は中枢管理機能都市，名古屋は産業技術都市，関西は学術文化研究都市といったふうに都市一地域圏の発展には特定化の傾向がみられるが，その傾向の促進には，国の政策が重要な意味をもっている（自治省，1986; 国土庁計画・調整局，1986 など).

(27) ウォークマンをつけて歩いているひとの，その周囲の環境との関係をみよ.

(28) この状況は，D. リースマンの『孤独なる群衆』(Riesman, 1950) における議論を前提にして考えるとき，ひとつの社会的性格としてはどのような形での把握が可能なのであろうか.

(29) したがって新しい社会運動にとっての重要な課題は，「フローの空間」における社会的意味の再構築である．グローバル・レヴェルでの「フローの空間」の展開と，歴史と文化によって形づくられた地方レヴェルの社会的制御の共同的実践との対立が，ひとつの新しい弁証法として浮かびあがってこよう．その際，後者の組織決定のキー・アクターとなるのは，地方自治体 (Local Governments) である．地方の自立と都市の自己管理 (Self-Management) が，ひとつのアピールとして，いままでとはちがった意味でこんご力をもってくるにちがいない．それは，国家と市民社会の関係の再構築を模索するものでもあるだろう.

このことが重要なのは，市民社会と政治システム（制度）のギャップが現在，広がりつつあるからである．政党は硬直し，新しい社会運動（フェミニズム，エコロジー，対抗文化等）によって表明された価値や要求を受け入れるのが困難であるようにみえる．運動の「制度化」じたいがもつ問題も，指摘されている (Offe, 1989).

(30) なにもせずしてすべてを知り，すべてを知りながら実際にはほとんどなにも知らないという状況が生じる．都市社会学はこんご“都市環境”における人間ではなく，“情報環境”に生きる人間を研究の対象にしていく必要があるだろう．“擬似環境”という言葉とはちがった意味において．それでも，基本的な対立はいつも，自然と人間のあいだにある.

(31) ひとつのたとえでしかないが，“都市的なスキゾフレニアの興隆 (Rise of Urban Schizophrenia)” ともいうべき状況にいる (Lipietz, 1989b; 1990; Castells, 1985).

(32) このことが重要であるのは，情報型の発展様式が基本的に，精神労働 (Mental Labor) の質に依存しているからである．(労働力の) 再生産過程の質が，組織の論理の重要な論点になりつつある．社会の再生産が高度に地域社会 (Local Society) に依存しているのであってみれば，環境の質，集団的消費の質とレヴェル，文化的革新をつくりだす能力等，情報の生産のプロセスのあ

らゆる鍵要素は，“生活の質 (Quality of Life)” と呼ばれるものにこんごますます依存するようになるであろう．

(33) この領域には，いわゆる社会運動と，もう少し日常的なレヴェルの諸実践の，2つの次元がある．後者については，P. ブルデュー，M. ド・セルトーらの仕事が参考になる．“空間の実践” に焦点をしぼった理論研究としては，D. ハーヴェイのものが (Harvey, 1989)，ひとつの方向を示唆してくれる．

参 考 文 献

Aglietta, M. (1976) Régulation et Crises du Capitalisme: L'Expérience des Etats Unis. Paris: Calmann-Lévy. 若森章孝・山田鋭夫・大田一廣訳『資本主義のレギュラシオン理論』大村書店，1989 年.

Aglietta, M. and A. Brender (1984) Les Métamorphoses de la Société Salariale. Paris: Calmann-Lévy. 斉藤日出治ほか訳『勤労者社会の転換』日本評論社.

Badham, R. and J. Mathews (1989) "The new production systems debate." Labor and Industry 2 (2).

Baldwin, T., J. Abel, and E. Skinner (1980) "New communication technologies and mass media environment: a question of access." National Forum, 28-30 Summer.

Bleustone, B. and B. Harrison (1982) The Deindustrialization of America. New York: Basic Books.

Bobroff, J., E. Campagnac, and P. Veltz (1980) "Division du travail et modes de vie: à propos de quelques orientation nouvelles dans la recherche urbaine en France." Anthropologie et Sociétés, 4.

Boyer, R. (1986) La Théorie de la Régulation: Une Analyse Critique. Paris: La Découverte. 山田鋭夫訳『レギュラシオン理論』新評論，1989; 新版，藤原書店，1990 年.

——— (1989) "Division du travail, changement technique et croissance: un retour à Adam Smith. Décembre.

Boyer, R. [éd.] (1986) Capitalismes Fin de Siècle. Paris: PUF. 山田鋭夫訳『世紀末資本主義』日本評論社，1988 年.

Carnoy, M. and D. Shearer (1980) Economic Democracy. New York: Sharpe.

Castells, M. (1972) La Question Urbaine. Paris: Maspero. 山田操訳『都市問

題』恒星社厚生閣，1984 年.

——— (1979) "The service economy and the post-industrial society." International Journal of Health Services, 6 (4).

——— (1983a) "Crisis, planning, and the quality of life." Society and Space, 1.

——— (1983 b) The City and the Grassroots. London: Edward Arnold.

——— (1984) "Space and society: managing the new historical relationships." in M. P. Smith [ed.] Cities in Transformation. Beverly Hills, CA: Sage.

——— (1985) "High technology, economic restructuring, and the urban-regional process in the united states." in M. Castells [ed.] High Technology, Space, and Society. Beverly Hills, CA: Sage.

——— (1989) "Social movements and the informational city." Hitotsubashi Journal of Social Studies, 21 (1).

Coriat, B. (1990) De Taylor à OHNO: La Révolution Japonaise en Gestion de Production. Communication au Colloque International: Autour du "Modèle Japonais." IRESCO-CNRS, Février.

Courlet, *et al.* (1987a) Etudes sur les Politiques Industrielles Locales dans le Cadre de la Promotion des P. M. E., Report. Grenoble: Institut de Recherches Economique et Prospectives.

Courlet, C. (1987b) "Developpement territorial et systems productifs locaux en Italie." Notes et Documents no. 22 ibid.

Crouch, C. [ed.] (1979) State and Economy in Contemporary Capitalism. London: Croom Helm.

Davis, M. (1984) "The political economy of Late—Imperial America." New Left Review 143.

Delorme, R. (1990) "The state and economic development." Paris: CEPREMAP, no. 9102.

Dumas, L. [ed.] (1982) The Political Economy of Arms Reduction. Boulder, CO: Westview.

Friedmann, J. and G. Wolff (1982) World City Formation. Los Angeles: University of California, Comparative Urbanization Studies.

Friedmann, J. (1985) "The world city hypothesis." Paper Presented at the ISA Research Committee on the Sociology of Regional and Urban Development, Hong Kong August 14-20.

Frobel, F. *et al.* (1980) The New International Division of Labor. Cambridge: Cambridge University Press.

Getimis, P. and G. Kafkalas (1989) "Spatial processes and forms of regulation: locality and beyond." Paper Prepared for the International Symposium on the Regulation, Innovation and Spatial Development to be held in Cardiff, 13-15 September.

Giddens, A. (1981) A Contemporary Critique of Historical Materialism. Berkeley: University of California Press.

——— (1989/1990) Sociology. Cambridge: Polity Press.

Glasmeier, A. K., (1985) "Innovative manufacturing industries: spatial incidence in the United States." in M. Castells [ed.] ibid.

Glyn, A., A. Hugues, A. Lipietz and A. Singh (1988) "The rise and fall of the golden age." UNU/WIDER Working Papers, to be Published in Marglin [1990].

Gordon, D., R. Edwards and M. Reich (1982) Segmented Work, Divided Workers. Cambridge: Cambridge University Press.

Gough, I. (1979) The Political Economy of the Welfare State. London: Macmillan.

Gottdiener, M. (1985) The Social Production of Urban Space. Texas: University of Texas Press.

自治省 (1986) 「高度情報化と地域社会〈概要〉」東京都情報連絡室報道部調査課編『情報連絡〈資料編〉』No. 4.

Halal, W. (1986) The New Capitalism. New York.

Harvey, D. (1982) The Limits to Capital. Oxford: Basil Blackwell. 松石勝彦・水岡不二雄ほか訳『空間編成の経済理論』(上) (下) 大明堂, 1989年.

——— (1985 a) The Urbanization of Capital: Studies in the History and Theory of Capitalist Urbanization. Baltimore: The Johns Hopkins University Press.

——— (1985 b) Consciousness and the Urban Experience: Studies in the History and Theory of Capitalist Urbanization. Baltimore: The Johns Hopkins University Press.

——— (1989) The Condition of Postmodernity: An Enquiry into the Origins of Cultural Change. Oxford: Basil blackwell.

——— (1990) "Between space and time: reflections on the geographical imagination." Annals of the Association of American Geographers,

80(3).

平田清明 (1969) 『市民社会と社会主義』岩波書店.

——— (1989) 「異文化接触と蓄積体制: レギュラシオン・アプローチの学際的展開」創立 60 周年記念論文集編集委員会編『神奈川大学創立 60 周年記念論文集』神奈川大学.

Hirschhorn, L. (1984) Beyond Mechanization. Cambridge, MA: MIT Press.

Houssiaux, J. (1957) "Le concept de 'quasi-intégration' et le rôle des sous-traitants dans l'industrie." Revue Economique no. 2.

今井賢一・金子郁容 (1988) 『ネットワーク組織論』岩波書店.

Itoh, M. (1990) "The japanese model of post-fordism." Paper Presented at UCLA Conference.

岩永真治 (1989) 「都市的生活様式に関する一考察」名古屋大学大学院文学研究科修士論文.

——— (1990) 「都市的生活様式の変容: 〈ポスト・フォーディズム〉をめぐる生活様式の諸問題」名古屋大学大学院文学研究科 [未発表].

Kato, T. and R. Steven (1989) "Is japanese capitalism post-fordist?" Presented to the 8th New Zealand Asian Studies Conference, Christchurch, 17-19 August.

金倉忠之 (1991) 『都市経済と空間理論』東京市政調査会.

Kenney, M. and R. Florida (1988) "Beyond mass production: production and the labour process in Japan." Politics and Society, 16(1).

国土庁計画・調整局 (1986) 「国土政策の課題と戦略に関する調査」東京都情報連絡室報道部調査課編『情報連絡〈資料編〉』No. 4.

熊沢 誠 (1989) 『日本的経営の明暗』筑摩書房.

Laigle, L. (1989) "La réorganisation du réseau des équimentiers de l'industrie automobile: de la sous—traitance au partenariat." D.E.A. Univ. Paris VII.

Lash, S. and J. Urry (1987) The End of Organized Capitalism. Cambridge: Polity Press.

Leborgne, D. (1987) Equipements Flexibles et Organization Productive: les Relations Industrielles au coeur de la Modernisation. Elements de Comparaison Internationale.

Leborgne, D. and A. Lipietz (1987) "New technologies, new modes of regulation: some spatial implications." 斉藤日出治訳「新たなテクノロジーと新たな調整様式」『クライシス』35, 1988 年.

——— (1990 a) "Fallacies and open issues about post-fordism." Conference Pathways to Industrialization and Regional Development in the 1990s. Lake-Arrowhead-UCLA, 14-18 March. [Very First Draft].

——— (1990 b) "Post-fordism: conceptual fallacies and open issues." Conference: Pathways to Industrialization and Regional Development in the 1990s. Lake-Arrowhead-UCLA, 14-18 March. 斉藤日出治訳「ポスト・フォーディズムにかんする謬見と未解決の論争」『窓』4, 1990 年.

Lecler, Y. and C. Mercier (1989) "Vers une gestion globale? Le partenariat dans l'industrie japonaise." Annals des Mines-Gérer et Comprendre no. 17, Décembre.

Ledrut, R. (1968) Sociologie Urbaine. Paris: PUF.

Lefebvre, H. (1974) La Production de l'Espace. Paris: Anthropos.

Leontieff, W. and F. Duchin (1983) Military Spending. New York: Oxford University Press.

Lipietz, A. (1977/1983) Le Capital et son Espace. Paris: Maspero/La Découverte.

——— (1983) "Les transformations dans la division internationale du travail: considerations methodologique et esquisse de theorisation." Paris: CEPREMAP, no. 8302.

——— (1985) Mirages et Miracles: Problèmes de l'Industrialisation dans le Tiers Monde. Paris: La Découverte. 若森章孝・井上泰夫訳『奇跡と幻影』新評論, 1987 年.

——— (1986) "New tendencies in the international division of labor: regimes of accumulation and modes of regulation." in Scott, A. J., and M. Storper [ed.] Production, Work, Territory. Boston: Allen and Unwin.

——— (1989 a) Choisir L'Audace: Une Alternative pour le Vingt et Uniéme Siècle. Paris: La Découverte. 若森章孝訳『勇気ある選択』藤原書店, 1990 年.

——— (1989 b) "The regulation approach and the problems of current capitalist crisis." Paper Prepared for an International Conference on "Marxism and the New Global Society." Sponsored by the Institute for Far Eastern Studies, Kyungnam University, Seoul, 25-27 October.

——— (1990) "L'approache de la régulation et la crise capitaliste dans les années 90: propositions alternatives." Conférence Annuelle de Théorie de l'Economie Politique. Kanagawa, 13-14 Octobre.

Marcuse, H. (1964) One-Dimensional Man. Boston: Beacon Press. 生松敬三・三沢謙一訳『一次元的人間』河出書房新社, 1980 年.

Markusen, A. (1983) High Tech Jobs, Markets, and Economic Development Prospects. Working Paper, Berkeley: University of California, Institute of Urban and Regional Development.

Martin, J. (1981) Telematic Society. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.

町村敬志 (1983) 「都市社会論の国家論的位相: 〈新しい都市社会学〉をめぐって」『思想』No. 711.

——— (1986) 「現代大都市の構造的変容: 〈世界都市〉化のインパクト」庄司興吉編『世界社会の構造と動態』法政大学出版局.

松原 宏 (1988) 『不動産資本と都市開発』ミネルヴァ書房.

——— (1990) 「都市経済地理学をめぐる理論の動向と課題」『人文地理』42 (4).

Melucci, A. (1989) Nomads of the Present: Social Movements and Individual Needs in Contemporary Society. London: Hutchinson Radius.

宮本太郎 (1990) 「ポスト・フォーディズムを問題にする意味」『窓』5.

Murray, R. (1988) "From fordism to flexibility: the place of retailing." Paper to the International Symposium on Microelectronics Revolution and Regional Development, Labour Organization and the Future of Post Industrialising Societies. Milan, April.

O'Connor, J. (1984) Accumulation Crisis. Oxford: Basil Blackwell.

Offe, C. (1984) Contradictions of the Welfare State. J. Keane [ed.], Cambridge, MA: MIT Press.

——— (1989) "Reflections on the institulional self-transformation of movement politics: a tentative stage model." Hitotsubashi Journal of Social Studies, 21 (1).

大谷信介 (1986) 「空間秩序と都市計画のプロブレマティック: 現代都市における自己実現」『経済評論』12.

Palloix, C. (1977) L'Economie Mondiale Capitaliste et les Firmes Multinationales. Paris: Maspero.

Piore, M. and C. Sabel (1984) The Seconde Industrial Divide. New York: Basic Books.

Pinch, S. (1985) Cities and Services: The Geography of Collective Consumption. Hampshire: Chapman and Hall. 神谷浩夫訳『都市問題と公共サービス』古今書院, 1990 年.

Portes, A. and J. Walton (1981) Labor, Class, and the International

System. New York: Academic.

Riesman, D. (1950) The Lonely Crowd. Yale University Press. 加藤秀俊訳『孤独な群衆』みすず書房, 1964年.

Sabel, C. (1982) Work and Politics: The Division of Labor in Industry. Cambridge: Cambridge University Press.

斉藤吉広 (1988) 「東京圏における雇用問題・雇用政策」東京自治問題研究所編『変動期の都市と雇用』.

Sawers, L. and W. Tabb [ed.] (1984) Sunbelt/Snowbelt, Urban Development, and Regional Restructuring. New York: Oxford University Press.

Saxenian, A. L., (1985) "Silicon Valley and Route 128: regional prototypes or historic exceptions?" in M. Castells [ed.] ibid.

Sayer, A. (1985) "Industry and space: a sympathetic critique of radical research." Society and Space, 3.

Scott, A. J., (1986) "Industrialization and urbanization: a geographical agenda." Annals of the Association of American Geographers, 76(1).

——— (1988) New Industrial Spaces: Flexible Production, Organization and Regional Development in North America and Western Europe. London: Pion.

渋井康弘 (1991) 「フォード・システム: 人間の〈機械化〉に基づく大量生産方式」『三田学会雑誌』84(1).

Stark, P. (1984) "Special report: VCR revolution, the big changes in entertainment." San Francisco Chronicle, 27 February.

Storper, M. (1985) "Technology and spatial production relations: disequilibrium, interindustry relationships, and industrial development." in M. Castells [ed.] ibid.

杉山光信 (1983) 「『経済学の生誕』の成立: 内田義彦の〈市民社会〉をめぐって」『戦後啓蒙と社会科学の思想』新曜社.

須藤　修 (1990) 『経済原論』新世社.

——— (1991) 「構造変動とオルタナティブ」海老塚明・小倉利丸編『レギュラシオン・パラダイム』青弓社.

Swyngedouw, E. (1986) "The socio-spatial implications of innovations in industrial organization." Working Paper, No. 20, Johns Hopkins European Center For Regional Planning and Research. Lille.

Swyngedouw, E. and C. Kesteloot (1990) "Le passage sociospatial du fordism à la flexibilité: une interprétation des aspects spatiaux de la

crise et de son issue." Espaces et Sociétés, 54-55.

Thurow, L. C., (1984) "Disappearance of the middle class." New York Times, 5 February.

Topalov, C. (1989) "A history of urban research: the French experience since 1965." International Journal of Urban and Regional Research, 13(4).

内田義彦 (1953) 『経済学の生誕』未来社.

山田鋭夫 (1991) 『レギュラシオン・アプローチ』藤原書店.

山之内　靖 (1991 a) 「システム社会の現代的位相〈上〉: アイデンティティーの不確定性を中心に」『思想』No. 804.

――― (1991 b) 「市民社会派の系譜とレギュラシオン理論」海老塚・小倉編『レギュラシオン・パラダイム』青弓社.

矢澤修次郎 (1990) 「アメリカ的生活様式とは何か」生活総合研究所『生活協同組合研究』4.

吉原直樹 (1983) 『都市社会学の基本問題』青木書店.

――― (1991) 「オータナティヴのゆくえ: 現代の都市理論」井上純一・谷口浩司・林弥富編『転換期と社会学の理論』法律文化社.

吉原直樹・岩崎信彦編 (1986) 『都市論のフロンティア』有斐閣.

若森章孝 (1991) 「レギュラシオン・アプローチの挑戦: 経済学から社会関係・国家論へ」『窓』9.

Walker, R. A., (1985) "Technological determination and determinism: industrial growth and location." in M. Castells [ed.] ibid.

Whyte, W. H., (1956) The Organization Man. 岡部慶三ほか訳『組織のなかの人間』(上) (下) 東京創元社, 1959 年.

Wilensky, H. (1974) The Welfare State and Equality. Berkeley: University of California Press.

Williams, F. (1982) The Communications Revolution. Beverly Hills, CA: Sage.

Wirth, L. (1938) "Urbanism as a way of life." A.J.S. 44. 高橋勇悦訳「生活様式としてのアーバニズム」鈴木広編『都市化の社会学』誠信書房, 1965 年.

(1991 年 10 月 30 日脱稿)